

## 真夏日

川口瑛璃

時刻はもう真夏日

四人がけのダイニングテーブルには  
セロリのサラダ、肉じゃが、キムチ、少々の白飯、  
溶け残った氷、麦茶、絆創膏、  
日誌と呼べぬものが、佇んでいた

安寧の地

いたくじゃがいもが煮えていたという噂は  
はるか遠くの秋にまでとどろいていたという  
わたしは向かいの席に  
先程まで熱視線を送っていたアスファルトを遊泳させた  
それは、息を帯びない木目の眼差しと混合し  
互いの熱が過干渉し合っている

そのたわむれに手を貸そうとすると、ひどく湿気た空気が  
丸みを帯びた輪郭をもってして静止する

水面に浮かべた時計は

否

水面に浮かべばよいとした時計は

おだやかに溶けゆく

すべてが仕組まれたホログラムのように

まっさきになくなってゆく

溶け残った外側だけが

わたしをひどく焦燥させる